
〈座談会〉

私の研究遍歴と教員生活を 振り返って

経済貿易研究所

2017年11月8日（水）10：30～12：30

神奈川大学1号館502会議室

座談会参加者

秋山憲治（経済学部教授）

上沼克徳（経済学部教授）

菅野光公（経済学部非常勤講師）

小林康宏（経済学部非常勤講師）

呉 春美（経済学部特任教授）

品川俊介（経済学部助教）

田島佳也（経済学部教授）

田中則仁（経営学部教授）

戸田龍介（経済学部長）

灘山直人（経済学部助教）

鳴瀬成洋（経済学部教授）

柳澤和也（経済学部准教授）

山口拓美（経済学部教授）

山本崇雄（経済学部准教授）

山本博史（経済学部教授）

横川和穂（経済学部准教授）

五嶋陽子（経済貿易研究所所長）



（秋山憲治氏）

【鳴瀬（司会）】 皆さん、本日はお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。ただ今より、秋山憲治先生を囲む座談会を開催したいと思います。ご案内しましたように、秋山先生は38年間、教員生活を送ってこられました。この間、大学教員になる前もいろんなことを経験され、大学教員になられてからも様々な方面でご活躍されたというふうには私は思っております。

学部長も経験されましたし、大学院研究科委員長も務められました。それも非常に重要な功績ですが、私が一番大きかったと思うのは、やはりアジア研究センターを立ち上げて、その運営に携わってこられたということで、これは非常に大きい功績ではないかと思えます。もちろん研究面においても多くの論文、著書を著されまして、つい最近も著書を刊行されたのがご存知のとおりであります。そして、多くの大学院生も輩出されております。

そういうさまざまなことにつきまして、今日は秋山先生に語っていただくということがあります。一応12時までを予定しておりますが、会場は1時まで確保しておりますので、多少オーバーしても構いません。では、五嶋先生、ご挨拶をお願いします。

【五嶋】 鳴瀬先生から一応ご紹介がありましたので、やや蛇足的になりますけれども、改めましてご挨拶申し上げます。経済貿易研究所では2012年から定年退職される先生を囲んで座談会を開きまして、研究や研究生活の回顧でありますとか、当該研究分野の潮流の理解、そして大学教育の環境の変遷などを記録に残すというような企画を行っております。

今回、秋山憲治先生から「私の研究遍歴と教員生活を振り返って」というテーマでお話を伺えるということで、大変楽しみにしてまいりました。ご存知のように、秋山先生は国際経済、貿易政策、貿易の研究を専門とされ

ています。『アメリカ通商政策と貿易摩擦』、『技術貿易とハイテク摩擦』、『日米貿易摩擦の研究』、『貿易政策と国際通商関係』、『経済のグローバル化と日本』、『米国・中国・日本の国際貿易関係』、『貿易政策と国際経済関係』を単著として上程され、共著では『米国日系企業の現状と問題点－1985年プラザ合意以降を中心として』、『「日米同盟関係」の光と影』、『現代中国の消費と流通』、『東アジアの地域協力と秩序再編』、『現代国際経済論』などを刊行されていらっしゃいます。

あまりに多くの著書を出版されていらっしゃいますので、ここですべてを紹介することは可能ではありません。さらに去年は、カンボジアの経済発展やチベット高原の水問題に関するご研究を論文にされていらっしゃいます。鳴瀬先生からも言及されていらっしゃったように、学部、大学院教育にも尽力され、また、さまざまな要職に就かれる中で、秋山先生のご研究と教員としての生活が一体どのように刻まれていったのか、諸先生方と一緒に謹んで聞かせていただきたいと存じます。どうぞよろしく願いいたします。

【鳴瀬（司会）】 では、秋山先生、よろしくをお願いします。

【秋山】 人生の残り時間が少なくなると、自分の人生を振り返って、人によると自分史を書くという人もいと聞いておりますので、私の人生はどうだったのかと振り返るいい機会をいただき、非常に感謝しております。

どういうふうにお話しようかなと考えたのですが、一応、Ⅰ部、Ⅱ部、Ⅲ部と3つに分けてお話ししたいと思います。

Ⅰ部は、私の研究遍歴で大学教員になる以前の話です。これはあまり研究と関係ないのかもしれませんが、私の潜在的な問題意識を育む上の経験として、いろいろと役に立った

と思われますので、ここでは大学教員になる前の経験で、大学、放浪、院生、浪人時代で、これはもう私にとって、身分も定まらないし、何をしたいのか分からないふらふらの不安定時代でした。しかし、非常に何とかなるという楽観性に満ちていた、ある意味では非常にいい時代でした。どのような経験をして最終的に教員の職を得たのかをお話したいと思います。

Ⅱ部は、大学教員になってからです。大学教員になってから、最初は愛知大学（愛大）という豊橋の大学に赴任するわけですが、その時に研究の基盤が形成されていったのでその過程をお話します。愛大に17年勤めて、神奈川大学（神大）に移りました。神大でどのように研究生生活を過ごしたかですが、これはどちらかと言うと研究の範囲を拡大していったという時代だったと思います。

Ⅲ部は、教員生活を全般的に振り返って、教育とか学内行政とか、そういうものを簡単に振り返ってみます。3つのパートに分けてお話していきたいと思います。

私は非常に、時代に振り回されてきたというか、時代に非常に影響を受けてきた、そういうふうな人生だったという気がしますので、お配りしたレジュメにはちょっとした年表みたいなものを書き加えております。それぞれの時期に私が興味を持ったり、あるいは影響を受けたりした出来事を記しております。

I 私の研究遍歴—大学教員になるまで—

まず、I部の私の研究遍歴で大学教員になるまでについてですが、学部に入ったときが1967年でしたが、これはちょうどベトナム戦争が一番激しかったときで、反戦運動、デモがあちこちで行われていました。また、学園闘争と言うのか、学園紛争と言うのか、その当時、学生はみんな学園闘争と言っていまし

たけれども、後で考えればみんな単なる紛争だったのかもしれないんですが、その闘争が始まったときに私は入学していくわけです。

埼玉県の地方の田舎の進学校で男子校でもあり、大して面白くないなと思いながら高校生活を過ごしていました。その当時、国立大学は1期校、2期校というのがありまして、私が行った横浜国立大学というのは2期校なわけですが、本人からしてみると高校時代も面白くないし、大学に入学してみたら1期校は落っこちちゃうし、2期校に入っても何となく面白くない。

入学して、何とか面白いことはないかなというふうを探していくと、周りはみんな学生運動が盛んなものですから、そうするとこれはちょっと面白いんじゃないかなというふうな刺激を受けるわけです。私もその学生運動のメンバーの一員として最初は入っていくわけですが、そのときはベトナム戦争反対という単純な正義感から運動に入っていくわけです。またそれと一緒に、この時代に中国で文化大革命が開始され、そこでもって造反有理という言葉が出てくると、これはいろんなことを自己主張していいんだというふうな、幾らか開放的な自己主張の時代になってくるわけです。

後から考えれば文化大革命というのは、毛沢東主導による権力闘争に過ぎなかったということが分かってくるんですが、その当時の若者から見ると非常に新鮮な感じがあったんですね。そういう時代の中で、私も活動していくんですが、ところがだんだんと1年、2年ぐらい経って70年ぐらいになると、党派が出しゃばってくるんです。中核派とか核マルとか、いろんな党派が出しゃばってきて、囲い込みを始める。そうすると、私は非常に平和的なアナーキストだから、組織に属し、縛られるのが嫌だったし、まっぴらごめんということで、運動からだんだん離れていくとい

うことになるわけです。

しかし、実際に私の知っている連中の中には、その組織でもって活動して、京浜安保共闘とか連合赤軍とか、そういう活動に入っていて、今まだ刑務所に入っているとか、あるいは殺されてしまったとか、そういう連中も知り合いの中にはいます。その当時の若者というのは、非常に楽観的というか、ナイーブというか、そういう党派活動をやって、何か革命が自分でもって起こせるんじゃないかと思って、あるグループは北朝鮮にハイジャックしているし、あるいはアラブのほうに拠点づくりに出ちゃう、そういうふうな時代だったんですね。

そういう時代の中で、私は何をしようかというふうになってくるわけですが、そうしたときに、こんなところでごちゃごちゃしていてもしょうがない。もっと広い世界が見てみたいということで、じゃあ外国に出ようというふうな結論になっていきます。大学はストライキで1年以上にわたり閉鎖され、解除後も混乱を極め、勉強どころではなかった。一方、中古のトラックを手に入れ車持込の運転手などのアルバイトで海外への資金づくりに精を出した。また、どさくさに紛れ卒業し、「なんでも見てやろう」の海外放浪の生活が始まるわけです。

その当時は、1ドルが360円の時代で、外貨1000ドルまで持ち出し制限の時代です。安いルートで若者に人気があったのが、シベリア経由でヨーロッパに出ていくというルートです。新潟から船に乗ってナホトカに出て、シベリア鉄道に乗って、一部はハバロフスクからモスクワまでアエロフロートに乗ってという形で、1971年8月、片道切符でヨーロッパ向かったわけです。

西側のヨーロッパの国を、ぶらぶらと観光して歩くという放浪でした。ユースホステルに泊まりいろいろな国の人と知り合いになり

ました。一時、ロンドンで滞在したんですが、何しろ勉強するという意識はあまりないものですから、最初はともかく英語でも勉強しようかなと思い、公立の安い語学学校に、3カ月くらい行ったけれども、全然面白くもおかしくもない。というのは、文法の試験をやるとみんなできちゃうので、上級クラスに入れられるけれども、話すとなると話せない。日本語が頭の中でぐるぐる回っているが、当然英語では話せない。これでは英語を勉強しても仕方ないなと思って、やめちゃう。でも、その学校は安かったものだから、一クラス25人くらいいて、スペイン人やアラブ人などいろいろな国の人が来ていたので面白かった。みんなピーチクパーチク良くしゃべっていた。

その後はひたすらぶらぶらとロンドンの街中を歩き回った。ロンドンというのはご承知のように、非常に博物館とか美術館とかいろんな施設がありますからね。公園も立派で、ハイドパークとかいろんな公園があるから、公園をぶらぶら歩き、博物館に行つてという、そういう生活を毎日していたんです。

もちろん生活はどうするのかというと、どんどんお金がなくなっちゃうわけですから、皿洗いとかパン焼きのアルバイトをしたり、いろんなアルバイトをして過ごすんです。ただ、そんなことをして時間をつぶしているわけですが、だんだんマンネリになってきて面白くなくなってくる。日本に帰ろうということになるけれども、帰るときにただ飛行機に乗って帰るんじゃ面白くないから、中東とかアジアを回って、ユーラシア大陸を一周して帰ろうというふうにするわけです。

ロンドンからフランスを通過して、オーストリアに行き、それから当時のユーゴスラビアから中東のほうに入るのね。トルコのイスタンブールで朝4時ぐらいになったら、何か拡声器がうなってる。これは何だと思ったら、

ミナレット（モスクの塔）からイスラム教のコーランが朗々と流れてくる。

そうすると「これがアジアだ。何かこちらのほうが面白い」ということでもって、静的ヨーロッパから動的なアジアというように、非常に面白さを感じ、当面、中東でもってぶらぶらしてみようということで、結局トルコからシリアやレバノン、ヨルダン、エジプトなど、そして、イスラエルにも入って、キブツに1カ月ぐらい滞在して、そういうふうなことをしながら中東をめぐっていたわけです。50年近く前の経験ですが、今でも中東はある程度、リアリティーを持って、親近感をもってみることができます。

それから今度はイラクやイラン、アフガニスタン、パキスタン、インド、ネパールという形で西・南アジアを安宿に泊まりながらヒッピー旅行をし、東南アジアでは、お寺に寝泊まりしながらタイ、ラオスとか、香港、台湾、沖縄というルートを辿って、結局、ゆっくりと時間をかけ2年後の1973年に日本に帰ってくるわけです。旅行中は、いろいろな国の違いや現地の社会や人々の生活など知ることができ、また、外国の旅行者との交流など楽しい経験をしました。2年に及ぶ海外生活は、大きな財産となりました。日本にいると何もなくても周りがなんとなく配慮してくれ物事が進行していくが、海外では、自分で考え、判断し、意思決定し、自分で行動しないと何も進まないし、誰も助けてくれない。自分の人生の大きな糧になり、自立的な生活や志向の形成に役立ったと思います。英語はたいして上達しなかったけれども。

日本に帰ってきて、一番面白かったのはやっぱりアジアだと。そうすると、アジアは自分の中で大きな研究テーマになると感じていたんだけど、それをどうやって研究テーマにするのかというのは分からなかったんですね。

帰ってきてから、これからどうしようかと。2年後の8月に帰ってくると友だちが翻訳とかいろんな仕事を紹介してくれるんですが、どれもアルバイトです。そのうちに、アジアでインドとか非常に不衛生なところをもつともせず、出入りしていたから、日本に帰ってきたら肝炎になり急きょ入院生活に入ってしまった。

そこで、これからどうしようかといろいろ考えて、大学院にでも行こう、まじめに勉強しようというふうになるんですね。しかし、入院中に国公立の大学院に問い合わせしてみると、みんな大学院入試は終わっていた。私は入学試験というのははっきり2月とか3月に行われるものだと思ってたら、大学院は9、10月に終わってるというのが分かったんですね。間抜けだったんですね。もちろん私立大学は2月と3月にやってるけれども、何しろ学費が全然違う。ゼロが1つくらい違って、私が学部のとときの学費は月1000円ですからね。私立へ行くと、それが1万円になっちゃうわけですから。大学院も同じで、そうすると国公立以外には考えられないということで調べてみたら、横浜市立大学が2次募集をやるということがわかり、そこを受けて入ったということです。

大学院で2年間過ごすんですが、この2年は皆さんも大学院生活を送ってるわけですから、大して違ったことをやってるわけじゃなくて、私の場合はもうそのときには26歳過ぎてましたから、自立しなければならないので、夜は塾でアルバイトして昼は勉強するという、そういうパターンを2年間繰り返すわけです。このときは本当にまじめに勉強しましたが、放浪の不摂生がたたりまた入院するなど調子は良くありませんでした。休養と体力の回復の時期でもありました。修士課程を修了した時、すでに28歳になっており、今度はどうしようかと、友だちはみんな結婚し

て、職も安定して、だけど自分は何もない。2年勉強したんだからどこかに就職しようかなと思ったんですが、企業に問い合わせると、年齢制限オーバーでもってみんな駄目だよと言われる。というのは、修士は26歳までという年齢制限があった。その当時は、1973年に石油危機があり、それ以降、日本も非常に大変な時代になっており、雇用の状況も厳しくなっていたんですね。時代認識がいかに甘いかということの思い知らされました。

仕方がない。どうしようかと考えていたんですが、結局、前と同じように塾でアルバイトしながら生活していくんです。博士課程に行くという選択肢もあったんですが、横浜市大には、ドクターコースがなかったんです。今はありますけど、その当時なかったものですから、ドクターコースではかの大学にまた行くのも知り合いもいないし、結局そこでどうしようかと思案しておりました。

私の指導教授は相原光先生なんですが、この人は近経の学者で、その近経の学者の先生の下でもって、私はいろいろ勉強してたんです。その先生が見るに見兼ねたのか、ちょうどアジ研でプロジェクトがあると。そこの責任者としてプロジェクトを運営するので、「おまえ、ちょっと来ないか」という話があったものですから、喜んで、先生のかばん持ちみたいな形でアジ研のプロジェクトに入れてもらいました。うまい具合にそれは3年間あって、そこででもって論文も2本ぐらい書かせてもらいました。

それと同時に、米国人で国際経済学の大家のキンドルバンガーという人の『国際経済学』という本がありまして、その本の翻訳にも入れてもらいました。その翻訳も「第I編の国際貿易の理論」と「第II編の貿易政策」というところを担当させてもらいました。翻訳の出版に際しては、背表紙にちゃんと名前

も入れてもらってですね。そうなるとう貿易論あるいは国際経済学はできるんだというように、外部からは評価してもらえたのではないかと思います。博士課程には行かなかったけれども、実質的には皆さんがドクターコースでもってやったことと同じことを、私はここでやっていたんですね。

しかし、それだけやっていたのでは就職に結び付かないんですが、ラッキーなことがここで起こってくる。浪人して2年ぐらいしていたら、あるときに、駒沢短期大学から商業英語というのを教えないかという話が出てくる。1970年代の後半になると、日本は高度経済成長や石油危機を経験し、海外に進出し、エネルギー資源の確保など海外志向が強くなってきていました。そうすると大学の文学部や短大の英文科もシェイクスピアのような文学だけ読んでればいいというわけにはなくなってくるんですね。そうすると海外との取引で英語をどういうふうにするのか、どのように教えるかという問題が出てきました。けれども、その当時それを教える先生がいなかったんです。商業英語というのはどんなのか、何なのかというのは私も知らなかったんですが、これはチャンスだから、知らないけれども「やります」と言って、それに飛びついていくわけですね。それがひとつの転機になるんですね。

商業英語というのはある意味では、海外との英文手紙のやり取りですから、手紙の書き方、やり取りそのものはパターン化していて、非常に単純な文章なんですね。だけど、その中でもって1つ1ついろんな専門用語があるから、そのプロセスを知ってないといけないんだけど、短大の女子学生をごまかすぐらいは私もできたんです。(笑)だから、勉強しながらごまかして、2年間を過ごしていくというふうなことがあって、これがある意味では大学の教員、専任になるいい

チャンスとしてあったんですね。

以上が、一応第Ⅰ期の研究遍歴なんですが、先ほど、このⅠ期はある意味では楽観的
不安定期だというふうに私は言いましたが、
確かに不安定期でもって職もない、そういう
時代でも、実はちゃんと私は結婚して子供ま
で生まれている。その当時は非常にいい時代
だったんだと私は思います。今、非正規の人
たちが「こんな給料じゃ結婚もできない」と
言うけれども、私のこの時代は職もない。な
いときに結婚してもいいと言う人もいて、私
も結婚しても何とかなるだろうと思ってい
た。日本経済も、高度成長や石油危機など経
験してきたが、ほぼ右肩上がりの時代であっ
たので、何とかなんと楽観的に考えられる時
代だというふうに思えるんですね。

そんなことをしているときに、愛知大学法
経学部の経営学科が貿易論を募集している
というふうな話があり、応募しないかという話
が出てくるんです。愛大は豊橋にある地方の
大学ですが、経済学科もあり、経済学科のほ
うに理論をやる人がいたので、貿易論では、
実務的な貿易論を話してくれというふうな話
でした。翻訳もやっているから貿易論の大体
は分かっているだろう。商業英語でもって実
務的な内容も教えているから、教えられるだ
ろうということ、採用してもいいだろうと
いうことになったんだと思うんですね。今ほ
ど大学で職を得るのは難しくなかったのかも
しれません。貿易論と外国為替論と商業英
語、これを教える。地方の学校だからね。い
ろいろと分からないことも多いけれども、自
分で勉強しながら教えることをやっていたわ
けです。

Ⅱ 私の研究遍歴—愛知大学と神奈川大学—

これから大学教員になった第Ⅱ部の話にな
ります。1980年4月、32歳の時でした。採用
された愛知大学というのがとてつもなくいい

大学だった。中国・アジアを重視し国際人の
養成に力を入れた昔の東亜同文書院を前身と
した研究指向の大学でしたが、戦争に負け
て、引き揚げてきた教員や学生が中心になっ
て、豊橋の陸軍予備士官学校跡地を払い下げ
てもらって、そこに愛知大学が設立されたん
ですね。

そうしたら、国立大学並みの研究条件が付
いていたんですね。責任コマ数は4コマ、そ
れで前期後期10回やればいいと言われて。今
だったら信じられないような条件で、余裕を
もって研究ができた。ある先生などは、今、
論文執筆中で筆が走っているから「じゃあ、
休講」と、今では考えられない時代でした。

私は貿易論を担当していたんだけど、
どのように貿易論を研究するのかがまだ分か
らなかった。教えることはやっても、分析の
方法論が分からずにおり、模索中であつた。
経済学科で国際経済学を担当している先生が
「秋山さん、それはおれがやることだから」
と言われて、理論でなく、実務的なことを
やると言われても、私も実務はあまりよく
知らない。

そんなときにちょうど重要な転機が訪れま
す。海外研修という機会が、ちょうど就職し
てから5年目に訪れるんですね。1985年に国
外研究でアメリカに行くわけです。私の37歳
のときでしたから、ちょうど元気で体力もあ
る、勉強もできるということで、1年半ほど
米国に出かけました。

1980年代は、非常に興味深い出来事が起
こり、日本はバブル経済や日米摩擦を経験し、
90年前後には冷戦が終わり、地球規模で市場
経済になるグローバル化の時代を迎える。世
界では大きな変革が起こり国際経済とか国際
政治をやる人にとってみると、非常に面白い
時代になって、激動の時代を迎えるわけです
ね。こうした時に、外国に出かける機会が
あったことは、幸運でした。

ところが、ここでもって、また問題が起こります。受け入れ先を見つけなければならない。当時、特に師事したいアメリカの先生もいるわけではない。だから、その先生の下で勉強するというふうな意識はなかったんですね。人によっては「おまえ、キンドルバーガーを訳したんだから、キンドルバーガーのところへ手紙を書いて受け入れてもらったらどうか」と言う人もいたんだけど、キンドルバーガーも年なので、そこでやっても堅苦しいし嫌だなと思って、それだったらともかくアメリカを見ることを中心にやろうと決めました。西海岸のほうは大体いろんな情報が入ってくるから、じゃあ東海岸のほうの大学にどこかに受け入れてもらおうと、東海岸のニューヨークとかペンシルバニアとかワシントンとか、めぼしい大学に、受入れ依頼の手紙を書きました。

しかし、返事が来ない。待てど暮らせど返事が来ない。それでもって2度目に「返事はどうしたんだ」と問い合わせると、2度目の返事も来ない。そしてある1つの大学から「うちは博士号を持っている人以外は受け入れません」という返事が1通来たんですね。それで、「ここはやっぱり、アメリカというのは博士号を持ってないと研究者として受け入れてくれないところなんだな」ということに気づいた。

しかし、受け入れ先がないと海外研修に行けないので、ワシントン D.C. にあるジョンズ・ホプキンス大学の国際高等研究所 (SAIS) にまた手紙を書いて、「こちらは給料をもらっているので奨学金も要らない。ともかく研究するために図書館を利用させてくれと。あとはビザの関係で、受入れ承認の書類が必要なので、受入れ許可書がほしい」と。「まあ、いいだろう」ということで、ここが受け入れてくれたんですね。

ジョンズ・ホプキンス大学の国際高等研究

所 (SAIS) は、ワシントン DC 中の大学院組織で、建物が1つだけあるだけなんです。受け入れ先に訪問学者のデスクも何もないという、そういう状況だったんだけど、ともかくそこに1年いたんです。ところが、ワシントン D.C. というのは非常に良かった。良かったというのは、ワシントン D.C. は考えてみると政治家と外交官とジャーナリストの街なのです。

そうすると、そういう人たちは非常に文化水準も高いし、いろいろな情報があふれていました。ワシントン D.C. にスミソニアン博物館という有名なところがあります。これは1週間では見終わらないし、見飽きないぐらい大きな博物館群ですからね。外交官も多く、国際色が豊かで、うまいレストランもいっぱいあるし、週末はコンサートを開いているとか、非常に住みやすかったですね。私は家族は帯同しないで1人で行く予定でしたから、田舎の有名大学に行って1人でぼつんとしているというのは多分面白くないだろうなと思ったから、国際色豊かな都会のワシントン D.C. は、非常に良かった。

せっかく行ったんだから講義を聴講してみようとか、3カ月間ぐらいは大学院の講義を聴きに行きました。「国際経済の規制」という科目で、ちょっと面白そうだからと行ってみたら、その講師は国際経済取引の弁護士だったんですね。そうすると、ダンピングのような国際経済紛争をやるときの事例研究みたいな裁判の判例事例がテキストで、それを読んでこいと言うんだけど、何しろ英文の法律の用語がいっぱいある。日本の法律の用語もそうですけれども、英語も関係代名詞か何かがいっぱいくっ付いて、ワンセンテンスが50行ぐらいもあったりして、どこがどうくっ付いているのかよく分からないような、そういう文章がいっぱい出てくるんですね。

その学生の中に日本人の外務省のキャリア

で、研修に来ていた外交官の卵もいて、彼に「分かる？」と聞いたら、分からないと言うので、「これは大丈夫だ」と思って、「おれも分からないけれども、外交官の卵も分からないんだ」と思い、それで幾らか安心したんだけれども、とにかくそれを準備していだけで大変でした。一方では、そういうふうな難しいのがあるかと思うと、経済学の講義みたいなのを聴いていると、学生がどんどん質問しているんですね。講義の途中で手を挙げて、そうすると、ある学生は数式をみて「先生、イコールのこっちへ行ったら、何でプラスがマイナスになるんですか」というふうな、単純なそういう質問も出てくるわけですね。非常に難しいよく分からないような授業もあれば、移項したらプラスがマイナスに、マイナスがプラスになるとか、基本がちょっとよく分からないような学生もいるんだなということが分かるんですけどね。でも、そうやっている、「おれはこんなことをやるために勉強に来たんじゃない」ということにだんだん気づいてくる。

その当時1985年ですから、日米摩擦が非常に激化していた。G5の「プラザ合意」が発表されたり、議会では公聴会というのが毎日のように開かれていた。『ワシントン・ポスト』の新聞を見ると、トゥデイズ・ कांग्रेस（今日の議会）という欄があって、それを見ては、「今日は外交委員会で日米関係の公聴会やっているな」と。公聴会ですから、秘密じゃなく、誰でも入って聴ける。それを「じゃあ、大学で勉強していてもしょうがないし、そっちを聴きに行こう」というふうなことでもって、聴きに行くわけですね。

聴きに行きながら、自分の今度書くべき論文は、日米貿易摩擦というテーマで書こうというふうなことにだんだん具体化してくるわけですね。当然そこでもって、いろいろと資料収集をしていくということをやっていくわ

けです。一方、それでもって済むかといったら、私の場合はせっかくアメリカに来たんだから、アメリカを見てみなければ意味がないということでもって、休みになるとレンタカーを借りて、あちこち行きました。南部では、アトランタやフロリダの先端のキーウエスト、そして、ニューオリンズとか、北部は、ニューヨークやボストン、カナダのモントリオールやトロント、中西部のシカゴにも、どんなものかと見に行くわけです。そういうふうな形でもって一応、ワシントンD.C.で過ごしました。また、同じくらいの年齢の米国人とルームシェアしていたので、一人ぼっちの孤独を味わうこともなく、暮らすこともできました。

いろんなものを見学したことが、想像力の欠けている私にとってみると非常に役に立ちました。「百聞は一見に如かず」で、見たり聞いたりしないとなかなか理解や発展性がないんですね。このときの経験が、自分が米国とは何かということを判断するのに役に立っているような気がします。日本に帰ってきてからもいろいろと変化があるわけですから、自分の見たものを基準にして、ある程度リアリティーを持って、こういうふうに変化している、ああいうふうに変化しているといろいろと判断できるものですから、このときの経験というのは非常に良かったなと思っています。

そうこうして1年過ごしていると、じゃあ後の半年は西海岸のほうに移ろうということで、スタンフォード大学の東アジア研究センターというところに受け入れてもらうということになるわけです。ここでは、帰ったらどんな論文を書こうとかといろんなことをまとめたりして過ごした。ただ、ここはサンフランシスコのそばのパロアルトにあり、シリコンバレーの一角ですね、日本人の留学生もいっぱいいます。日本人の留学生との交流は

結構ありました。

留学生を相手にする非常に立派な施設がありました。国際センターというのがあって、そこに行くと留学生にホストファミリーを紹介してくれる。サンクスギビング・デー（感謝祭）など記念日に留学生が孤立しないようにとあって、ホストファミリーを紹介してもらえる。私も紹介してもらいましたが。それだけじゃなくて、ボランティアの英語の個人レッスンも紹介してくれるんですね。非常に品のいい年配の奥さんが私に教えてくれました。また、生活するのに必要な生活用品も貸し出してくれる。お茶を沸かす道具とかアイロンとかいろんな生活用品を貸し出してくれたりしていたんです。あと、プールとかテニスコートとかいろんな施設があり楽しみましたね。

日本人の留学生の中で、経済の大学院生がいて、ちょっと話をして「あなた、どこの出身？」と聞くと「東大です」と。「東大のどこ？」と聞くと、「数学科です」とか「物理学科です」とかと言う。そういう理系の学生が転向して経済学をやっている。となると、高等数学を使った経済理論みたいなのをやっていたら、これはとてもじゃないが太刀打ちできないなというふうに思いました。そのうちの1人は、今、一橋大学の先生になっていますけどね。文科系でちょっと経済学をやったというぐらいじゃ、数理経済学のような分野では、国際的には太刀打ちできないだろうなと印象を持ちました。

もう1つ印象的だったのは、学生がコンピュータを持っているんです。マッキントッシュのコンピュータを、ちょうどこの四角い箱みたいなものを持っていて、それで、自分のところから大学の図書館にアクセスして資料を見ることができる。あるいは、コンピュータでもってレポートを書いているという話が出てくるんですね。そうするとスタンフォー

ドではコンピュータの利用が日常化しているのだというのが分かってくる。そうすると、私もそれを買って日本に持ち帰ろうかなということも考えたんですが、どうもまく日本では接続できない、使いこなせない、ひょっとしたら、その当時まだ持ち出し制限があって、持ち出せないという話もあったので、結局買ってこなかったんですけどね。

そうこうして、日本に帰ってくるのですが、帰国してから、生産的な執筆が始まる。生産的な執筆が始まったのは、1つは先ほど言いましたように、現地の事情をよく知っていたということと、もう1つ私が非常に役に立ったのは、実用的なワープロができてたというのが大きかったんですね。1985年8月に行くときに、東芝が出していた「書院」というワープロを持っていったのですが、それは本当に1行ぐらいの小さなスクリーンがあって、メモリはほんの少力で、手紙を書くくらいしか役に立たなかった。それが10万円もしていたんですね。帰国したら、論文を書くのに十分なワープロができていた。私はフロッピーディスクを使う富士通のオアシスを買ってやってみたら、ご承知のように、入力もできて、削除もできて、修正もできるから、そうすると、今までの手書きで原稿に書いて修正して真っ黒に汚くなってというふうなそういう時代じゃなくて、いろんなことができるようになったんですね。論文の執筆を効率的にできるようになった。悪く言うと論文の粗製濫造がここで始まるわけだけれども、頭に浮かんだものをどんどんとコンピュータに打ち込んでいって、それをあっちこっちへ動かしながら論理展開し、論文をつくっていき、論文も年に3本くらい書きました。

ある時、同文館出版の編集者が大学に営業活動に来ていろいろ話したら、本を出さないかという話になって、学内誌に書いた論文を加筆・修正して最初に出版したのが『アメリ

カ通商政策と貿易摩擦』という本でした。ちょうどタイムリーなテーマだったからよく売れました。続いて『技術貿易とハイテク摩擦』という本も間も無く出してくれた。

2冊出したら、さすがに手持ちの論文は尽きるんですが、2冊出したところで、愛大の経済学部のある先生が「秋山さん、博士号を取らないの？」と言うので、「出身大学はドクターコースもないし、指導教授も定年になって辞めているから、審査する人もいない」と言ったら、「じゃあ、うちで審査してあげるよ」と言ってくれたので、これ幸いと博士論文の審査をお願いしました。これまで出版した2冊の本を編集し直して『日米通商摩擦の研究』という本に1冊に纏め、1996年3月博士号を授与されました。非常にラッキーでした。

一方、1990年代は、激動の時代でした。世界では、社会主義圏の崩壊で、東西対立・冷戦が終了し、地球規模の市場経済となり、グローバル化が進展し始めました。中国も1992年社会主義市場経済を採用し、93年には、世銀レポート『アジアの奇跡』が発表され、アジアも高い経済成長を実現していました。日本ではバブル経済そしてその崩壊、いわゆる失われた20年が始まっていました。

この時期、私の研究領域が、日米関係から中国、アジアへと拡大し始めました。米国に滞在した1985年から10年経った95年に、米国にもう1回行く機会がありました。そのとき、米国に直接投資した自動車工場などインディアナ州のいくつかの日系企業を見て回ってきました。また、ワシントンD.C.に行くと、昔、資料収集をした社会科学系の本屋さんに行ってみたら、昔はずらっとジャパンセクションの棚があり日米関係の本があったのが、チャイナセクションに変わっていました。ワシントンD.C.では日米貿易摩擦の時代は95年には完全に終了し、今度は中国なん

だなどというのがよく分かる。本棚がチャイナ関係書籍に代わっていたんですね。また、前にも話しましたが、愛大が中国との関係が強いものですから、私もしばしば中国に行く機会も出てくるんですね。中国に行ってセミナーに参加したり、中国との行き来も頻繁になり、私の興味も日米から中国を含めた、日・米・中のトライアングル関係などに興味がだんだんと移っていきました。

そうこうしていた時、1997年神奈川大学に採用されました。愛大は居心地のいい大学であったし、大変お世話になったんですが、だんだんと私も50歳近くになると、新幹線に乗って東京と名古屋を行ったり来たりするのも疲れてきたし、両親も年老いてきたのでそろそろ関東圏に帰りたいと思ったときに、うまい具合に49歳の時、神大に移ることができました。

これから、神大に移ってからの話になりますが、神大は、1996年、97年と箱根駅伝で優勝し華やかなときでした。しかし、時代は大変な時期を迎えていました。1997年7月、タイからアジアの通貨・金融危機が始まり、日本では、同年11月に山一証券や北海道拓殖銀行が経営破たんし、バブル破たんの深刻な後遺症が発生していました。学生にとってみると、就職氷河期の時代でした。愛大にいたときは結構みんないいところに就職していくのに、こっちに来てみたら学生がなかなか就職できない。ゼミ生なんか聞いても、半分以上就職できないで卒業していったというときもあって、だんだんと時代が変わったということが分かった。そういう時代に神大に移ってきたんですね。

アジアの通貨・金融危機は、グローバル化の揺らぎの第1歩であり、1999年にはシアトルのWTO閣僚会議では、反グローバリズムのデモが激化して死者が出たり、2001年にはアメリカのITバブルも破裂して、同年9月

には米国で同時多発テロも出てくる。一方、中国は、2001年12月 WTO に加盟し、国際経済の正式メンバーとして加わってくる。

この時期は、2001年10月アフガン戦争や2003年3月イラク戦争などいろいろなところで地域紛争が起こってきて、世界はテロの時代に入ってくる。そうこうしていると、2008年はご存知のようにリーマンショックが出てくる。世界同時不況と言われ、グローバル化の矛盾が世界的な規模で起こってくる。各国の経済格差も拡大してくる。日本では、尖閣諸島国有化問題や TPP 交渉への参加なども活発に議論され、2013年に TPP 交渉に日本も参加する。一方、中国でも一帯一路構想という中国の広域経済圏構想も動き始める。

私の貿易政策は、時代の変化の中でいろいろと面白いテーマが出てくる。いろんな興味が湧いてきて、そうするとだんだんと研究テーマが拡大してくる。私の研究は広く浅くというように、いろんなところに飛び散っておりますので、研究者は狭い範囲でもって深くやるべきだと言う人もいるわけですが、どうも私の場合は狭く深くというふうなことができず、あちこち興味が分散していったというわけです。貿易政策の場合はいろんな制度が大きく影響するわけですので、制度分析という形で、制度を元にして研究を深めていくということになっていったんです。

神大に非常に私が感謝しているのは、国内研究とサバティカルを取らせてもらったことです。研究休暇を2回ほど、それぞれ時期をずらして1年ずつ取ることで、まとまった研究時間が持てたことは非常に有益でした。

神大に移って、学部の主任を2年務めた後、2003年から1年間国内研究を取りましたが、グローバリゼーションということを考えるよい機会でした。このときは、『経済のグローバル化と日本』というブックレットのようなものを御茶の水書房から出させてもらい

ました。また、この時期、ちょうど私の教え子が東欧のスロバキアにあるトヨタ系の自動車のシートを作る工場に赴任していましたので、これ幸いと思って訪ねました。東欧には行ったことがないし、冷戦終了後の社会主義圏の変化など見るのにいい機会だと思い、チェコやハンガリー、ポーランドのクラクフ、アウシェビッツも見てきました。40日間ぐらい、西欧も含めて、もう1度ヨーロッパをぶらぶらしてきました。ロンドンは大きく変化していました。

サバティカルは、ちょうど学部長を退任した63歳の時で、2011年3月に研究休暇を取らせてもらいました。大学院研究科委員長と学部長と4年間役職が続き、外では、貿易学会の会長を2年間務め、私的には父親の認知症の介護で毎週末に実家に帰っていました。いろいろなことが4年間に重なり年齢的にも消耗しており、サバティカルは非常にありがたかった。体力の回復だけでなく、研究生活への復帰できる機会でもありました。サバティカルは何をしてもいいわけですが、あまり行く機会のない中央アジアとか新疆ウイグル、バングラデシュへ旅行し、カムチャッカは学会のシンポジウムで行った。サバティカル後も、体力のあるうちに行っておこうと思い、ミャンマーやラオス、モンゴルとかチベットなど、行く機会を作っています。また、最近ではアジア研究センターの現地視察で、中国や東南アジアなど1年に一回ぐらいは出かけています。

以上のように、私の研究遍歴は時代の動きに影響され、また、現地を動き回ること、問題意識を誘発され、刺激を受けてきたと言える。研究については、内容はともかくとして、出版した本の数とかを考えるとそれなりにやったかなと思っています。

Ⅲ 教員生活を振り返って

最後の第Ⅲ部「教員生活を振り返って」ですが、よく教員の任務には、教育、研究、学内行政、社会貢献と4つのことがあって、教育、研究、どちらが優先かという、どちらも重要だけれど、私は准教授までは研究を優先にして、教授になったら教育がいいんじゃないかと思ってますけれども、とにかくこの4つが大学教員の任務としてあると言われております。

研究については、すでにお話ししたので、教育について話しますが、経済学部の教育というのは大体、大人数で大教室でやるので、まあまあ可もなく不可もなく、学級崩壊もなく、それなりにコントロールしながらやったかなというふうなことは思っています。最初のうちは、板書などしていましたが、最近では、パワーポイントを利用して、また、私の講義は、現代の状況を扱っているので新聞の切り抜きなどいろんな資料を配布したりして、学生に時事問題に興味を持たせるようにしています。アンケートの調査を見ると「分かりやすい講義だ」というふうな評価もあったので、取りあえず可もなく不可もなく、講義はできたかなというふうに思っています。

ゼミについては、全部詳しく数えたわけじゃないですが、最初の愛大のときから数えると600名ぐらいのゼミの卒業生はいるだろうと思われそうですが、その中には総代に選ばれた学生もおりますし、卒業論文は毎年書かせております。神大では卒業論文集を毎年出していますが、愛大のときと神大の場合は、先ほど話しましたが、愛大はバブルの時代を通して、日本の経済がまだまだ良かった時代でしたが、神大では、就職の氷河期に当たり、失われた20年の中にちょうど当たってしまうので、なかなかゼミ活動をうまくまとめることができなかつたのではないかと、ちょっと忸怩たる思いがありますね。彼らが今どうし

ているのかと心配ですが、コンタクトがなかなか取れない。むしろ年賀状をくれるのは名古屋の愛大の卒業生が多く、連中はある意味ではうまく人生がいったということなのかなというふうにも思いますが。

あと大学院ですが、大学院についてはまず留学生中心に30名から40名ぐらいは指導教授として修士論文を書かせたのではないかと思います。皆まじめで一生懸命勉強しました。大学院でも2名ほど学生総代になっています。卒業生のうち3名は、今、中国の大学の教員になっていますし、起業して成功しているものもいます。日本にしばしば来ますけれども、日本の大企業と連携してビジネスを行っているようです。よく私とは連絡を取っており、中国事情など情報交換をしています。大学院で、私が心残りなのは、残念ながら博士の学位を授与できなかったということです。神大の場合は、博士の学位を取るのがなかなか難しい。ですから、私も修士までは引き受けるけれど、博士の学位は3年で取れるわけではなく、5年、6年とかかる。それなら、むしろ日系企業とかそういうところに就職をして、人生を過ごしたほうがいいんじゃないかと思っていたのです。博士課程の学生を採用する勇気が、私にはなかつたということで、今となっては心残りです。

学内行政ですが、これは大学院研究科委員長と学部長をやらせてもらいました。学部長時代の思い出とすれば、学生定員200名の削減と教員の増員が理事会で決定されました。学部長のとき、大学基準協会から自己点検・評価が求められる7年に1回の訪問評価の時期に当たっていたので、いろいろと準備が大変だった思い出があります。しかし、そのときに教員の数と学生数の洗い出したいのが大きなテーマになって、出雲先生にカリキュラム委員長をお願いしその下で検討され、さらに後藤先生が経済学部の自己点検・

評価の責任者でいたので、非常にいいチャンスだったと思います。教員1人当たりの学生数が90名以上いましたので、50名ぐらいにしようとするいいチャンスだったんですね。本学の競合校と思われる青学とか駒沢とか東洋などの大学を調べると、みんな50名かそれ以下の学生数だった。これは経済学部での1つの大きな改革事項でしたので、学生数の削減と教員増の要望書を理事長と学長に出しました。大学の経営企画室も調査したらしく、また、理事長のほうは、そのときは後藤先生が理事だったものですから、理事長を含めて何回か外に飲みに行って訴えました。それが効果があったどうか分かりませんが、理事会で学生定員を200名削減、教員を若干増やすというのが、私が学部長を退任してから理事会で決定されたというふうに聞いています。これが、私の学部長の時の成果と言えるかもしれませんが、強力な主任の人たちのサポートや理事の後藤先生にも助けていただいた結果だと思います。

それと、先ほど鳴瀬先生のほうからお話がありましたアジア研究センターですが、5年前に設立され、私は最初から所長を仰せつかり、すべて一から組織を作るという経験を持たしてもらいました。すでにできている組織を運営するのではなく、一から立ち上げていくという機会は滅多にないものですから、これは非常に面白かったですね。すでにお話ししましたように私はアジアに非常に興味を持っていましたので、熱心に取り組みましたし、私の人生の中で滅多にない貴重な体験ができたなというふうに思っています。

もう一時間以上過ぎていたので、あと社会貢献ですが、これは市民講座の講演とか新聞のエッセーとか、それなりのことはやったのかなというようなことは思っています。

終わりにですが、全体的に見て、私の教員生活は、ある意味では非常にラッキーな時代

を過ごしたのかなと思います。今の若い人は、文科省の締め付けや18歳人口の減少など学校運営にかかわる時間が多くなり非常に忙しかったりしているもので、私の場合はうまい具合にいろんなところをバランス良くやらせてもらったと思っています。他の人の評価は分かりませんが、私の力量の範囲で、地道にそれなりに十分にやったという自己満足を持っています。自己満足で私の教員生活を終わりにできたというのは、非常に幸せだったなというふうにも考えております。今後は、論文執筆や講義の準備のための読書ではなく、興味の赴くまま、自由に読書するなど気ままに過ごす予定です。自由な時間を楽しみにしています。以上です。

【鳴瀬（司会）】 どうもありがとうございます。38年にわたる先生の研究遍歴と教員生活を振り返って、お話いただきました。お話いただけないことも多くあったと思います。まだ時間がありますので少し、座談会ですから皆さんからもご発言をいただきたいと思います。

誰でも良い仕事をするためには3つ条件が必要だということが、一般に言われると思います。「良き師、良き友人、良き時代に恵まれる」ということです。先生は相原先生という良き師に恵まれたと思います。そして、浪人をしているときも、いろんな友人からアルバイトを紹介してもらうなど良き友人にも恵まれたと思います。

でも、何よりも一番大事なのは、良き時代ということだろうと思います。しかし、その時代の中に生きているわれわれは、今生きている時代がどういう時代なのかということをつかむのは結構難しいと思うんですね。ところが、秋山先生は、その時代が提起している問題を的確にとらえて、そのときの一番ホットな 이슈にそれぞれ果敢にチャレンジし

てこられたであろうと思います。

それが日米関係であり、あるいは米中摩擦であり、さらにアジアとか中国、東南アジアの問題というように、問題関心が移っていかれたというのは、先生がその時代時代を本当に的確にとらえられていたということではないかと思います。私の大学時代も学生運動などがあって、先生のお話に共感するところも随分ありました。私はそういう感じを受けましたが、どうでしょうか。皆さんのほうから何か感想なりご質問などがありましたら、出していただきたいのですが。

【菅野】 では、呼び水でいいですか。経済学部の非常勤講師、4月に来たばかりの菅野です。71歳です。いろんなことを聞きたいし、ちょっと先生と場を変えてディスカッションしたいのですが、ひとつだけ。先生が最後におっしゃった、今の学生にどう伝えるかということが私自身の今のテーマでもあり、死ぬ前のテーマなんです。

先生の本当に面白い学生時代とその後の放浪時代を、多分、そのまま伝えたら今の学生は、「ああ、じいさん、自慢話してるな」で終わりでしょう。そこら辺のご経験とか、うまくいった事例、うまくいかなかった事例をどう伝えるか、あるいは今の学生の心をつかむ何かコツと言いますかね。それがあればありましたら、ぜひヒントに教えていただきたいのですが。

【秋山】 なにぶんにも、今の学生に自分の経験などをうまく伝えるというのは難しいです。愛大のときには、時代は国際化ということで、みんな海外に目が向いたので、私の話を非常に面白く聞いてくれました。それで自分で計画して卒業旅行で海外に行ったり、バックパッカーとしてタイとかそういうところに出ていった学生もいました。けれども、今の学生はその話を聞いても、なかなか自分にとってリアリティーを持てるというレベル

にないんですね。

【菅野】 そうなんですか。

【秋山】 そうすると、どういうふうに話していいかなんですけれども、今の学生には「海外に行け」と言うよりも、「学生時代はお金はないけれども時間があるんだよと。まとまって取れる時間をどうやって過ごすの。会社に入ってしまったら時間が制約されてしまっているけれど、今だったらいろんな時間の制約がなく動けるんだから、その中で自分の一番の優先課題を探して行動すべきで、その1つとして海外があるのでは」とそういう形で話をして動機づけする以外になかなかできないですよ。

だから、学生の中には海外に語学留学のような形で飛び出すものもいますが、1人で飛び出すとかそういうふうな学生よりも、やっぱりツアーに入ってその中で連れていってもらおう、そうでないととても行く勇気がない、そういう人も出てくるわけです。

【菅野】 アレンジを待ちますね。支援されることを待ちますよね。

【秋山】 そうですね。例えば学生が、卒業時に「先生、今度、謝恩会やってください」と言うんですね。「謝恩会をやってくださいと言っても、謝恩会というのは君たちが私にやるもんだらう」と言うんだけれども、連中は自分たちがセットされたものを受け入れるという、そういうふうな時代にずっと育ったものですから、自分が自ら計画を立てて、ましてや海外に出て行くなんていう、そういう発想自体が非常に希薄なんだらうという印象があります。また、失われた20年とか言われるように、日本の閉塞感が影響しているのかもしれない。

そこら辺が時代が変わってしまったのかなと思うのですが、それでも、今は社内言語が英語になる時代だよとね。楽天を見てごらんとか、日産を見てごらん、重役会議だって英

語でやっているんだ。となると、「君たちはそういう時代に今生きているんだから、そのときにどうやって今後生きるの?」というふうな事例を出して、それでもって日本に留まっていて、それだけでやっていける時代じゃなくて、これから君たちはひょっとしたら、そのうちに「タイに行ってください」と会社から海外勤務を言われるかもしれない。

自分は大企業じゃなくて中小企業に入ったから、多分地元でどこにも異動もなくて働けると思っていても、そのうちに中小企業だって小企業だって、海外にも出ていく時代ですから、そうしたら、そのときに「君たちは、じゃあバングラデシュに行ってください」という話だって必ず出てくる可能性もあるんだから、目をそちらに向けておかないと駄目だよという話をする。そういう時代の状況を話しながら、学生に意識が向くように一応話しているんですけども。ただ、学生がどれだけそれを理解しているかというのは、なかなか私も分からないんですね。

【菅野】 ありがとうございます。

【鳴瀬 (司会)】 ほかにいかがですか。何でも。研究面でも教育面でも、いかがでしょう。はい、上沼先生。

【上沼】 秋山先生は私よりちょっと年齢が上なんですけれども、今日あらためて先生の経歴をずっと聞いていて、奥の深さ、幅広さを感じました。広く浅くじゃなくて、大したもんだなと思って聞いていたんです。これだけいろいろなことを経験されていると、いろいろな観点からものを見る目を持っている。日本だけじゃなくて、アメリカも知っているし、アジアも知っている、それからヨーロッパも知っている。

そうすると、僕は逆に教えてほしいというか、サジェスションを与えてほしいんですけど、神奈川大学の将来について、理事長じゃありませんけれども、お聞きしたいんです。

今度の理事長は85歳というからびっくりしちゃったんだけど。まあ、それはいいとしてね。

われわれは神奈川大学の将来はどうあるべきかということを真剣に考えるべき結構重要なところに来たと思うんですよ。マラソンで勝って浮かれて、建物ができたと浮かれている場合じゃないと思うんですけどもね。それはそれでいいことですけどね。

特にいろいろな世界を肌で感じて知っていて、年はほぼ同じなんですけど、僕より先輩で、学園紛争のころからずっと、大学とは何かというのを本当に肌で感じて考えてこられた。そういう先生なればこそ、やっぱりお聞きしたいんですよ。

【秋山】 私はこれから定年になるので、神奈川大学の将来となると発言は難しい。でも、神奈川大学の学生を見ていると、理解力はある。教えればちゃんと理解して、いろんなことにもまじめに取り組んでいる。けども、チャレンジしたりするところが非常に欠けていると思うんです。自分で難しいことにチャレンジしないで、あるいはもう少しチャレンジしていけば、ひょっとしたら神大よりも、もっと偏差値の高い知名度のある大学に受かるぐらいの能力を持っていると思うんだけど、性格がおとなしかったりする、そういうふうな学生が多いんですよ。

その原因はひょっとしたら、学生がつくっているんじゃなくて、教員がつくっているのかもしれないという気がするんです。つまり、ちょうど今の神大にいる先生たちの中には、今の自分のポジションが非常に心地良いというふうなことを思っている先生がかなり多いんじゃないかなという気がするんですよ。

そうすると、教員もチャレンジしなければ学生もやらないと思う。もうちょっと教員が跳ねてくれるというか、教員もそういうふう

にならないと、将来はなかなか難しいかなと思う。本当にこぢんまりした中堅大学というところで、終わってしまうという可能性があるのではね。経営とか立地条件だって、ここは悪くはないのに。

例えば神大と同じようなカラーで地味な大学として、駒沢大学とか東洋大学とかがある。青学はちょっと違ったカラーですけども。でも東洋大学を見ると、都心のど真ん中に大きな国際宿舎のようなものがあるんですよ。理事長だって大物を、例えば、財務大臣をやった塩じい（塩川正十郎）とかを連れてきてやっている。

そうすると、もうちょっと大物をとってはおかしいけれども、神大も外部のもっとリーダーシップの取れるような大物を連れてきて、思い切った改革を考えないと、神奈川大学も経営は安定して居心地いい大学だけでも、イマイチだよねというふうなところになってしまうんじゃないかなと、私はそういう危惧を持っているんですけどね。

【鳴瀬（司会）】 よろしいですか。ほかにいかがでしょうか。

【菅野】 今、話が出たんですけど、大物という意味で、先生がジョンズ・ホプキンスにいらっしゃったころ、出会われた官僚とか何かで、今、大臣になっている連中が、まだ誰かいないかな。あるいは、三井物産の寺島（実郎）さんなんかは同じ時期にいなかったんですか。

【秋山】 寺島さんは、私のちょっと後に来られたと思います。

ジョンズ・ホプキンスの関係には結構いろんな人がいるんですよ。ただ、私、個人的に知っているというのは多くはないですけども。

【鳴瀬（司会）】 ほかにいかがでしょう。山本先生、アジア研究室センターとの関係で何かないですか。あればお願いします。

【山本】 そうですね。アジア研究センターは運営委員をやられた後藤先生と秋山先生のお二人が中心になって設立されたという経緯がありまして、実際、秋山先生にはずっと5年間、所長を務めていただきました。ただ、私は評議会などに出るようになって、大学の立ち位置というのがつい最近やっと分かるようになってきました。それで何と言うんでしょう、研究ができなくなってきているということ、いろんなレベルで感じます。

例えば教員の自覚の問題です。大学の教員になることが目的で、研究するために大学の教員になっているんじゃないで、教員になるために研究しているということです。そうすると目的達成されてしまうと、私もそうですけど、結局あまり大したことをやらなくなってしまふ。私も何とか老骨にむち打っているつもりなんです、年齢的にも行政等々で莫大な時間を取られるようになってくると大変です。

私は神大の卒業生なので、教育も何とかしようといういろいろやるんですけども、なかなかやっぱり難しいところがある。特に経済学部の中では研究者を育てる部門がほとんど枯渇してしまっている。これから先、文科省の対応等々を考えてみると、われわれは教育大学にどんどん落ちていくという危機感がある中で、アジア研究センターのようなところで何とか頑張ることができないかなという気はしています。

ただ、なかなか大学院の人たちを研究者にできないということがありますが、それはこれからはますます難しくなると思いますが、それを経済学部はやってこなかった、その路線を放棄したような気がしないでもない。僕が神奈川大学の中で教育していただいたということもあって、そういうことをいろいろ考えるんです。

それからもうひとつ。昔の教員はいろいろ

苦勞しており、秋山先生の放浪生活2年のような経験って人を強くするところがありますし、1回路線を離れてみるといったこと、実は私もそうだったので非常に共感するところがあるんですが、研究にはそういうことも必要なのではないかなと、お話を伺って思いました。

駅伝の話もありましたが、僕は駅伝があるといいことがあったなというのを覚えている。僕は大学院で一生懸命勉強して、博士号を取って1年目で就職できたんですけど、ちょうど駅伝が強かったころなんですね。博士号を取った時期と就職が決まった時期というのが、駅伝が強かった時期と重なるんです。今また同じように駅伝が強くなって、何かいいことが神奈川大学にないかなという希望を持っています。

鈴木健吾君という素晴らしいランナーが出たことで、またそういう気もしていますので、何とかもう少し頑張りたいなという気がしています。先生のお話を伺いながら、アジア研究センターだけではなくて、学部の研究部門も頑張っていないといけない、何か考えていかないといけないなということを強く思いました。

【秋山】 私の時代は、毎年1本は論文を書いていましたが、今のようにどこかの国際的な雑誌や学会誌にレフェリーに審査されて出すというのではなくて、発表する場所というのは、大学の紀要と、あとは学会の全国大会で発表したのを学会の年報に出す、この2つしか考えられなかったんですね。

それだということと内向きになっちゃうから、私が言われたのは、論文に書いたものを溜めて、時期が来たら必ず1冊の本にまとめて世に問うということです。そういうふうなやり方を教えられたものですから、私も1年に1本は何とか何らかの形で書こうと思っていました。書くのをやめてしまうと書けなくなっちゃうんですね。だから、それはできるだけ必ず毎年1本は、論文でなくても活字にしようというふうな思いでやってきました。

アジア研究センターでも研究費を使ったら必ず何か書いてねというふうな幾分制約を付けてお願いしているんですよ。予算を使ったら現地報告でもいいし、論文にできるんだったらそれが一番いいけれども、できなくても資料紹介なり何らかの形で研究成果を必ず出してくださいと言っているんですね。そういうことをしていかないと、なかなかまとまっ



たものにはならないと思うんです。

【鳴瀬（司会）】 ほかにいかがですか。よろしいでしょうか。秋山先生は今年度で専任教員としてはご退職になります。あと3年間は非常勤講師として貿易政策と国際経済関係論を講義されます。まだまだ体力も残っているということですので、教育にも尽力していただきたいですし、確かこれからは非常勤講師も論文を投稿できるようになったんですよ。ですから、時間もありますから、年に1本と言わずに3本、4本書いていただいて、教育、研究両面において神奈川大学にまだまだ貢献していただきたいと思います。

秋山先生の今後のご健康とご活躍をお祈りしたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

【秋山】 皆様のご参考になればと、お話ししましたが、年を取ると、自己肯定的に自慢話になったり、的外れだったり、生きた時代の違う若い人たちには役に立たなかったかもしれません。その点、ご容赦いただけたらと考えております。お聞きいただき、有難うございました。